

毬子

——『野ざらし紀行』から

光田和伸

1

芭蕉と名のり始めて間のない松尾桃青（一六四四—一九四）が、貞享元年（一六八四）から翌二年にかけて企てた、江戸から上方までの往復の旅は、彼自身の手になる旅の記録（『野ざらし紀行』）によって、広く知られる。この旅の途中で、彼の作風はそれまでの侘屈な談林末期の調子を次第に脱して新しい文体に変わってゆく。いわゆる「蕉風の曙」と呼ばれる時期に入る。

芭蕉のこの変貌のきっかけは何だったのだろうか。深川に入庵した後、たまたま近くの臨川寺に九年に渡り来住していた、鹿島根本寺の仏頂禅師に参禅したことが、一つの契機になったであろうとは、しばしば指摘されることである。連歌は「優美」や「あはれ」を特色とする。これに対抗して興った俳諧は「自由」と「をかしみ」を

標榜した。二つは互いに対立することによって、おのれの分を確かめている。そこへ、蕉風は、この対立を超えて成立する。それは「自由」でありながら「優美」であり、「をかしみ」を失わず「あはれ」なのであった。

和解の余地なしと見える対立のあるところに、その対立を丸ごと取め取って、しかもそこに対立のあった気配さえ残さない。私は禅というものになお詳しくないけれども、形式論理で矛盾と見えていたものの上に、禅が新しい思いもかけぬ樞目をつけてゆくことは、しばしば聞くところである。この時期に芭蕉の中で起こった、連歌と俳諧との「歴史的和解」のために、彼の参禅経験の果たした役割は、なるほど小さくないのかも知れない。

深川の芭蕉庵から仏頂禅師の臨川寺までは、庵の前の小名木川にかかる万年橋を南に渡り、川に沿って東に二町半進んだのち右折し、

小路を二町ほどたどると左手の寺である。徒歩で数分の距離。折にふれて芭蕉が禅師の声に接したとしても不思議でない。伝承のなかには、次のように具体的に両者の交情について述べるものがある。

むかし翁、混本寺の仏頂和尚の弟子と成りし時、折々ごに行きかよひ、勤学ありしに、仏頂は、かたのごとく俳諧を制せられしに、或る時、近里に時齋ありて、仏頂、翁をとまひ行きしに、道々も亦俳諧のことを言ひ出だされしに、翁のいはく、俳諧はただ今日の事、目前の事にて候、と申されしかば、しからばそこにある木槿にて一句せよとありし時、即吟也と。

其の時に、仏頂つらつら考へて曰く、善哉々々、俳諧もかかる深意あるものにこそと、殊に感ぜられて、のちは制し給はずとかや。禅意に叶へるところありと見ゆ。

これは、芭蕉の「道のべの木槿は馬にくはれけり」について、安永二年（一七七三）に素丸（二七一三―一九五）の刊行した『芭蕉翁発句解 説叢大全』の紹介する伝承である。実は右の句も『野ざらし紀行』中、駿河での作であり、素丸もそのことに触れて、この伝承を一応は疑っている。ここに禅の影響を感じ取った後人が、かような「伝承」を仮構したものかもしれない。

談林調を次第に脱して蕉風に移行する。それは『野ざらし紀行』

の記事に従うなら、紀行の前半で少しづつ醸成され、吉野山を下りて美濃路を歩み、名古屋に入るころに明確になる。紀行の本文について、禅の影響を具体的にこの箇所と指摘することは困難である。しかし、細かく見てゆけば、明らかに禅の影響と考えるほかない作意は、『野ざらし紀行』中に、早々と登場している。

2

富士川のほとりを行くに、三つ計なる捨子の哀れげに泣く有り。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたえず、露計の命待つまと捨て置きけむ、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂より喰物なげとをるに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝、ちちに悪まれたるか、母にうとまれたるか。ちちは汝を悪むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけ。

ここで、後半「いかにぞや」以降に述べられていることは、疑いもなく芭蕉の現の境涯と重ね合わされている。彼はまだ少年であっ

た日に父を亡くした。慈しみ育ててくれた母は、昨年夏、故郷で世を去っている。この旅の目的の半ばは、いわば故郷における母の不在を確認しに行くこと。彼もまたひとりの「捨子」であったのである。

さて、前半の部分において、芭蕉が「猿を聞く人」として思い浮かべているものは、猿の声に旅愁を感じる長い文学伝統を紡いで来た中国の詩人である。直接には恐らく杜甫であり、その代表作の一つ「秋興八首」の第二に、

猿を聴いて実を下す三声の涙
使ひを奉じて虚しく随ふ八月の槎

とあるを踏まえると、既に寛政十年（一七九八）刊の『増註桃青翁句彙』に指摘する。一方「捨子に秋の風」は中国から見れば東海の辺土、日本の眼前の景。

捨子の秋風になくと、暁の猿と、断腸いづれが深からんとなり。

（蓼太・芭蕉句解・一七五九刊）

猿の叫びを聞くさへかなしきに、ましてや捨子にあらくあたる秋風の寒さ、身にこたへてかなし、いかにせんとならん。

（吞吐・芭蕉句解・一七六九稿）

巴峽の暁猿は他国なれば聞くも叶はず（中略）、猿を聞きてさへ悲しむ人、此の捨子の泣声をあはれまざらんや。

（素丸・芭蕉翁発句解説叢書大・一七七三刊）

捨子の秋風に泣くと暁の猿声と断腸いづれか深かるべき。

（鷗沙・蕉翁句解過去種・一七七六稿）

捨子の秋風に泣くと、霜夜の猿と其の悲しみ、何れか腸を断つべしと也。

（信胤・笈の底・一七九五稿）

詩つくりも歌よみも、猿の声ばかり悲しき限りはなしといへり。その人々に此の捨子の秋風に泣くを聞かせなば、いふ言の葉もなからんとぞ。

（杜哉・芭蕉翁発句集蒙引・一七九〇頃成）

猿を聞く人は「猿を聞て実を下る三声の泪」と杜子美が秋興の詩にも作りしごとく、かなしさ上もなし。其の悲しさと捨子に秋風の吹いてあるかなしさとは、いづれがかなしさまさと、問ひつめたる也。猿と人間と一ちくにいふなと也。

（何丸・芭蕉翁句解大成・一八二七刊）

こうして、江戸期の注釈類を見渡してみれば、どれもみごとに一致している。中国の詩文の伝統中にある「猿声」と、日本の眼前の「捨子に秋の風」とを比較して、かなしさの点では眼前の「捨子」の景の方が更に増さるのであると、句意をただ一方へ定めている。

近代の注では、山本健吉の、

哀猿の声と秋風に吹かれる捨子の泣声と、どちらが本当に哀切であるかが、ここに問われているのだ。猿声は古来詩によく詠まれ、猿声を聞いて腸を断つのが、詩人の常套だった。ここでは芭蕉は、捨子の泣声に断腸の思いをしていて、風流めいた猿声の哀れさなどより、こちらの方がよほど切実なのだ、と言っている。句合せの判の形式を模しているので、「猿声に秋風左勝 捨子に秋の風」といったところ。

(芭蕉全発句・一九七四刊)

に代表されるように、殆どが江戸期の注を踏襲、ないし敷衍している。わずかに加藤楸邨の、

捨子を悲しむ切実な心が、古来詩人によって悲しいものときられている猿声をひきあいに出して、問いかけるかたちで発想されたのである。実感につき入って、そこからそのままうたいあげてはいないが、これをなんと聞くか問いかける趣にしたところに、現実の相に堪えがたいまでに動揺していた芭蕉の心がうかがわれるのである。風騒の人に対して、どちらが悲しいかと、単に風趣の上での比較として問うたとするのはあたらない。

(芭蕉全句・一九六九刊)

という解釈が注意を引く。ここで楸邨は、「いかに」は単にいずれかの意ではなく、『猿を聞く人』への禅問答的な呼びかけととるべきである」という形で自分の「直観」の根拠を示している。

「単に風趣の上での比較として問うたとするのはあたらない」という楸邨の主張を、私は正しいと思う。そればかりではまだ不十分であって、「比較として問うたととる」のは間違いであろうと思う。それは、この句の形、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

を見ればわかること。一句の意が比較にあれば「捨子に秋の風いかに」ではなく、「捨子に秋の風といかに」ないし「捨子に秋の風にいづれ」の形を取ることが、より素直であり、自然であろう。同じ紀行の後半で「明ぼのやしら魚しろきこと一寸」「海くれて鴨の声ほのかに白し」の作例を見せていることを考えれば、この程度の破調を恐れる心は、まだこの時期の芭蕉の配慮のうちにはないと見てよい。比較するつもりは、芭蕉の胸中にはおそらく毛頭も、ありえなかった。

「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」は、もし訳を試みるなら、

「猿を聞く」人よ、「捨子に秋の風」、どうか。

3

とする他ないのであるが、その「どうか」は、恐らく毛頭も比較のつもりで発せられたのではない。かといって、楸邨の言うように、「現実の相に堪えがたいまでに動揺していた芭蕉の心がうかがわれる」とも私は考えない。この「どうか」の由来は楸邨の言う通り、禪の問答に発しているとも私を見る。

趙州、投子に問ふ、大死底の人、却つて活する時、如何。投子云く、夜行を許さず、明に投じて須く到るべし。

(碧巖集・從容録)

僧問ふ、如何なるか是れ、祖師西來の意。州云く、庭前の柏樹子。
(無門関・從容録)

禪家にあつて、師弟の問答で、すべての気合をあつめて発せられる語、それが「如何」である。そのことさえ見失わなければ、芭蕉の此の句が、杜甫を師として、その面前に参ずる思いで発した言葉であることは明らかであろう。それは杜甫が「猿声」によって聞き留めたと同じものに、いま自分も「捨子に秋の風」という形で貫かれている、という心のうねりに繋がっているはずである。

心のうねり、などと不用意に言ってしまったが、芭蕉は富士川のほとりで捨子に出会ったのであろうか。古来、この条については仮構か実録か、議論が喧しい。どちらに味方するつもりもないが、次のような事実は、はっきりと覚悟しておく必要がある。

杜甫が「秋興八首」を詠んだあたりは長江上流の難所、三峡の一つ、「瞿塘峡」。中国を代表する激流として知られる。一方、富士川は東海道随一の急流として著名、今日なお日本三大急流の一つに挙げられる。「瞿塘峡」の「猿声」に対して、「富士川」の「捨子」の声。偶然にしては話が出来すぎている。先ずそのあたりから、芭蕉の作意が動いたことは十分に考えられる。

『野ざらし紀行』には、芭蕉自筆の絵巻が残されている。その富士川の条をみると(図1)、右上から流れてきた川にはうねるような水流が描きこまれ、いかにも急流の風情である。川がやや幅を広げて、葦とおぼしい草が生えはじめのあたりに、捨子らしい子供が描かれる。側には橈も置かれている。対岸を行くのは槍をかついだ武士のようである。芭蕉の姿はない。

これを当時の東海道の富士川近辺の図(図2、3)とくらべてみると、ひとつの不思議に気づく。図2は、この旅の六年後にあたる元禄三年(一六九〇)に刊行された『東海道分間絵図』(菱川師宣

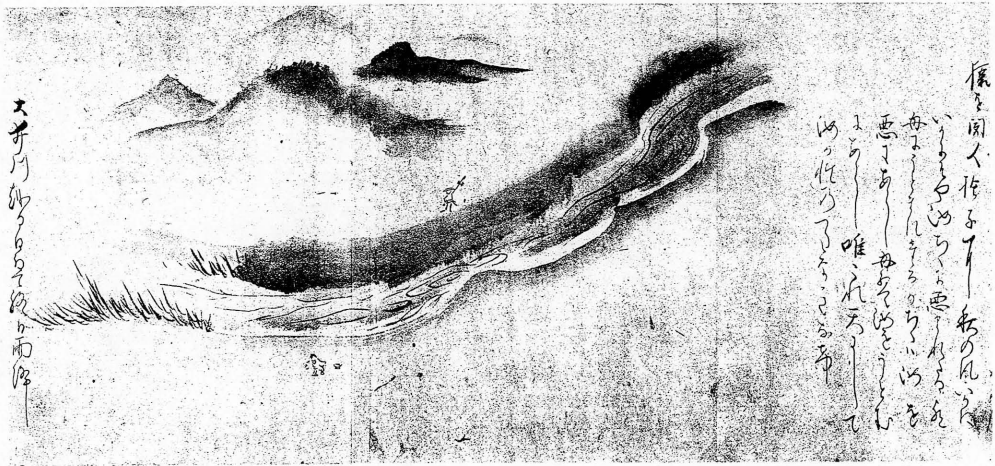


図1 芭蕉自筆の絵

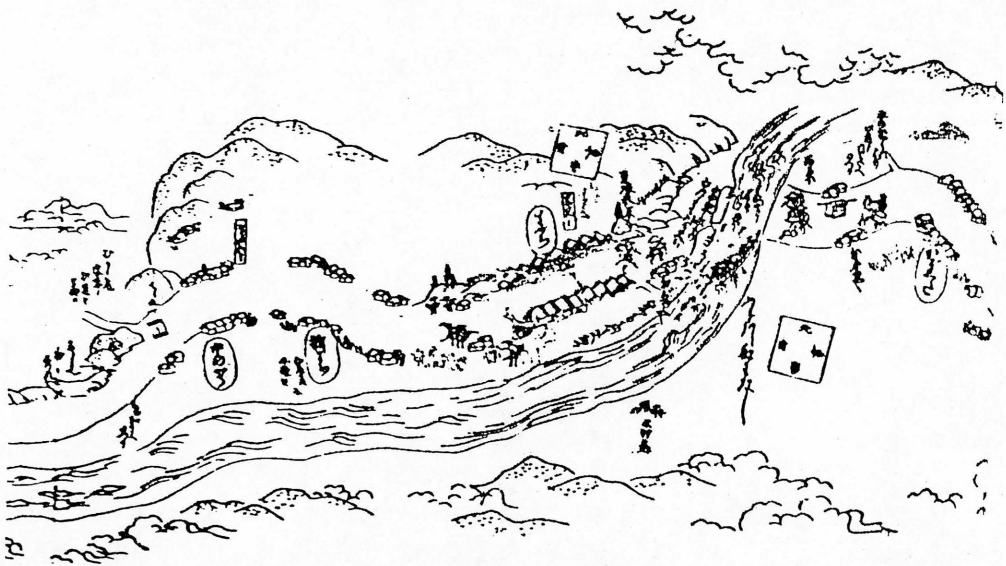


図2 『東海道分間絵図』(菱川師宣画)



図3 『新板東海道分間絵図』

画)であるが、川の流れ方の角度や山の配置から見て、芭蕉がこの種の案内図を手元に置いて絵巻を描いたか、或いは道中で景色をスケッチしていたか、いずれかであろうと推測される。しかし東海道は、このときの芭蕉のように江戸から上方に向かう場合には、この場面のはるか上流の富士川に、始めて丁字型に出合い、これを徒渉した後に対岸を川の流れに沿って下ってゆく。「富士川のほとりを行くに、三つ計なる捨子の哀れげに泣く有り」というなら、常識的に捨子との遭遇は川を徒渉したのちの出来事であるはず。絵巻で捨

子のいるあたりを東海道は遂に通過しない。宝暦二年(一七五二)に刊行された『新板東海道分間絵図』(図3)でも事情は同様である。絵巻では旅人は確かに捨子の対岸を川に沿って通行していて、正確に描こうという意図が芭蕉にあったことを思わせる。

それにもかかわらず、芭蕉はなぜ捨子を東海道の対岸に描いたのか。いや、むしろ視点は捨子の側にあるから、愚直に考えるなら芭蕉は富士川を渡る前に東海道から外れて、堤防沿いの踏み分け道のようなところを川に沿って下流に向かう途上で、捨子に遭遇したということになる。川のこちら岸を河口に向かっても遂に対岸の東海道へと徒渉する場所はない。実際に芭蕉がこのような行動を取ったとは思えない。この捨子の配置はどのような意図によるものだろうか。画の構成上のバランスを考えたのだろうか。構成上の配慮は、このような生々しい出来事の起こった場所さえ対岸に移動させてしまう程のものなのだろうか。何よりまた、本文に、

袂より喰物なげてとをる

とさえある。富士川の下流域は川幅広く、対岸から遠投によって何らかの食を届けることは先ず有りえない。捨子がいたとして、泣き声さえ聞こえてきたか、どうか。下流の徒渉は不可能であったと思われるから、改めてこれに近づくこともできない。東海道の実情を

知る者の目で見れば、絵か文か、そのいずれかが虚構であることは見やすかったはず。捨子が、その有無自体はともかく、都合よく富士川のほとりを選んで泣いていたことは疑わしいと見なければなるまい。

4

この富士川の条について、私にはもうひとつ、何としても腑に落ちない点がある。実にささいなことのだが、喉に小魚の骨が刺さったように落ちつかない。他でもない、右に引いた、

袂より喰物なげてとをる

という、あまりにも乾いたしうちの記述である。親しみ始めて幾年か、私の胸中に次第に成就しかかっている芭蕉像と、このところばかりは、何としても容易に合致しない。おのれの目を相手の目の高さに合わせて、言葉をかけながらその手に握らせる——芭蕉なら、そうするはずである、と私は思う。何故「投げて」通る必要があったのか。いや、「投げて」通ると書きつけておく必要があったのか。袂から出した「喰物」とは、相手が幼な児でもあり、普通に考えれば、握り飯か何かであろう。あまりにもろくて、どう考えても投げ与えるにふさわしい食べ物ではない。何かの趣向なくして、芭蕉がこのような「破綻」を見せつけるはずないのである。

僧問ふ、初生の孩児、還た六識を具するや、也た無しや。

趙州云く、急水上に毬子を打す。

僧復た投子に問ふ。急水上に毬子を打するの意、如何。

子云く、念々不停流。

(碧巖集)

僧が尋ねる。生まれたばかりの幼な児にも、やはり「六識」は既に備わっているのですか。

趙州が言う。急流に毬を投げつける。

僧は、また投子に尋ねる。急流に毬を投げつける、とはどういうことですか。

投子が言う。刹那刹那の思い、片時もやまず流れ去る。

『野ざらし紀行』の富士川の条のすべてが、この一節から思い付かれたと、私は言うのではない。ただ、現であれ幻であれ、旅の途中に幼い捨子とその声があり、歩いてゆけば、その前途に、触れるもの全てを押し流すかのような急流があった。その時、眼前に杜甫が頭ち現れた。句をまとめる束の間も、急流は休むことを知らない。すると今度は趙州が現れて言う、——君のその丸い握り飯、つまり今日の君の命、それを投げ捨てないで、君はこの旅で何に出会い、何をしでかすつもりなのか、と。